

Table4 「親の経験」項目とバリマックス回転後の因子負荷量行列（信頼性 $\alpha$ ）

	I (.874)	II (.867)	III (.750)	IV (.643)
提供会員のおかげで、子どもの身体面が安定した(病気や怪我が減った)。	.700	.259	.178	.133
提供会員のおかげで、子どもに、挨拶などの礼儀作法が身についた。	.654	.297	.334	-.006
提供会員のおかげで、子どもの精神面が安定した。	.643	.270	.378	-.003
提供会員のおかげで、子どもに、早寝早起きなどの生活習慣が身についた。	.632	.182	.103	.058
提供会員から、食い初め等年中行事や、伝統文化の大切さを教えてもらった。	.628	.324	.117	.120
提供会員のおかげで、子どもにコミュニケーション能力が身についた。	.578	.200	.440	.000
提供会員のおかげで、子どもの病気への対処に関して不安が減った。	.551	.351	.283	.092
提供会員に、親としてだけでなく、社会の一員として認められた。	.507	.394	.290	-.010
提供会員から、物事の見方・考え方を教えてもらった。	.374	.758	.246	.049
提供会員に、育児の悩みを聞いてもらった。	.315	.725	.294	.053
提供会員に、育児の方法を習った。	.321	.626	.187	.033
提供会員から、親としての姿を学んだ。	.480	.495	.343	-.075
提供会員から、効率的な家事や節約の方法について習った。	.411	.478	.050	.195
提供会員や本事業は、いざと言うとき助けてくれる存在になった。	.120	.118	.722	-.099
提供会員のおかげで、家族以外の人と関わる機会ができた。	.324	.234	.579	-.025
提供会員を、地域のボランティア(有償・無償)として尊敬している。	.140	.101	.549	-.224
提供会員に連絡すればよいと思うと、孤立感を感じなくなった。	.298	.351	.491	.031
提供会員に、無理なお願いを引き受けてもらった。	.356	.210	.412	.041
提供会員に、プライベートなことを聞かれ嫌な思いをした。	.078	-.029	-.050	.699
提供会員から、子育ては母親がすべきものと言われた。	.116	.106	-.066	.645
提供会員に、子どもを預けることが不安になった。	-.015	.033	-.055	.515
積寄与率(%)	19.7	33.6	45.7	52.0

Table5 「親の経験」次元得点平均（標準偏差）

	利用者	P
第1因子：子どもとの関わり方を学ぶ経験	2.28 (0.75)	***
第2因子：家事や育児の方法を学ぶ経験	2.24 (0.81)	***
第3因子：地域とのつながりを学ぶ経験	3.18 (0.63)	***
第4因子：地域の煩わしさを知る経験	1.20 (0.40)	***

注. \*\*\* &lt; .001

Table6 「親の経験」と属性の相関

	就労	頻度	会員	地域別
経験Ⅰ	-.143***	.417***	.018	.015
経験Ⅱ	-.032	.256***	-.009	-.022
経験Ⅲ	-.101**	.273***	.017	.018
経験Ⅳ	-.038	.045	-.087**	.045

注. \*\* P &lt; .01 \*\*\* P &lt; .001

Table7 「親の経験」と利用頻度の相関

	月1回未満	月20回以上	P
経験Ⅰ	1.64 (0.62)	2.69(0.66)	***
経験Ⅱ	1.68(0.68)	2.44(0.73)	***
経験Ⅲ	2.61(0.83)	3.41(0.45)	***
経験Ⅳ	1.19(0.43)	1.22(0.39)	

注. \*\* P &lt; .01 \*\*\* P &lt; .001

Table8 「親の発達」次元得点平均（「以前そうだった」を含む）

	除外前	P
第1因子：柔軟性	3.27 (0.73)	***
第2因子：自己抑制	3.55(0.64)	***
第3因子：運命・信仰・伝統の受容	3.67(0.54)	***
第4因子：視野の広がり	3.14(0.69)	***
第5因子：生き甲斐・存在感	3.25(0.59)	***
第6因子：自己の強さ	2.86(0.70)	***

注. \*\*\*p&lt;.001

Table9 「親の発達」次元得点平均（「以前そうだった」を含まない）

	除外後	P
第1因子：柔軟性	3.01(0.59)	***
第2因子：自己抑制	3.11(0.52)	***
第3因子：運命・信仰・伝統の受容	2.75(0.58)	***
第4因子：視野の広がり	3.31(0.48)	***
第5因子：生き甲斐・存在感	3.00(0.49)	***
第6因子：自己の強さ	2.60(0.57)	***

注. \*\*\*p&lt;.001

Table10 「親の発達」と属性の相関

	就労	頻度	会員	地域別
発達I	-.082	.074	-.087*	.068
発達II	.065	-.002	-.068	.013
発達III	.014	.037	-.016	.140**
発達IV	.080	.036	-.133*	.077
発達V	-.063	.063	-.030	.068
発達VI	-.039	.029	-.056	.100*

注.\*P&lt;.05 \*\*P&lt;.01

Table11-1 「親の経験」と「親の発達」の相関

	発達I	発達II	発達III	発達IV	発達V	発達VI
経験I	.225***	.214***	.230***	.160	.271***	.222***
経験II	.145**	.171**	.242***	.202***	.174**	.103*
経験III	.194***	.150**	.178***	.263***	.207***	.116*
経験IV	.039	.025	.081	.023	.072	.069

注.\*P&lt;.05 \*\*P&lt;.01 \*\*\*P&lt;.001

Table11-2 「親の経験」と「親の発達」の相関 (\*\*P < .001のみ)

発達 経験	柔軟性	自己抑制	運命・信仰・ 伝統の受容	視野の 広がり	生き甲斐 ・存在感	自己の 強さ
子どもとの関わり方	○	○	○		◎	○
家事や育児の方法			○	○		
地域とのつながり	△		△	◎	○	
地域づきあいの煩わしさ						

◎値が.025以上 ○値が.02以上 △数値が.015以上

一方、地域づきあいの煩わしさを知る経験については、発達の6因子すべてと相関は見られなかった。このことについて考えてみると、「プライベートなことを聞かれいやな思いをした」「子育ては母親がすべきものと言われた」「子どもを預けることが不安になった」という経験が、柔軟性や自己抑制、運命・信仰・伝統の受容、視野の広がり、生きがい・存在感、自己の強さなどを育てるとは、必ずしも言えないことがわかる。

しかし、次のような発達のケースをどのように捉えたらよいただろうか。以下は、Cさんの事例である。Cさんは、子育てをしていて、精神的に限界の状態だからこそ、本事業を利用したという。当初は、本事業を利用することによって、自分が支援する側になるまで意識を変えるとは思ってみななかったという。Cさんは、本事業利用当初、支援者との関係に煩わしさを感じていたものの、アドバイザーの支援によって、自分自身が振り返る機会を得て、地域の子育て支援者のリーダーとして成長していった方へのインタビューである。

<インタビュー1>

利用している時は、提供会員の気持ちが全く分からなかった。「子どもを預かってもらうために、こっちは、お金を出しているでしょう、だからそっちも黙ってやってよ」という状態。提供会員と利用会員の交流会の時、アドバイザーが、利用者の気持ちを、何でもみんなに教えてやって、とってくださいました。わたしは、提供会員に「子どもを預けたときに、コンビニ弁当を食べさせていたとか、お尻にかぶれができてからちゃんとした方が良かったとか、いろいろ言われると、ストレスがたまるので、言わないでほしいです。ただ、預かってもらえたらいいです。」と伝えた。【2006.8.30 筆者のインタビュー】<sup>④</sup>

<インタビュー2>

子どもから離れたくて、少しでも離れることができる機会がある、ということで本事業の託児付き講座を受けることにした。家に子どもとこもっているときは、自分だけが悲劇のヒロインだった。外に出て初めてみんないろんな気持ちを持っていることを知った。自分と同じで、言葉に表せない「なんとなくブルーでイライラする」気持ちの人がいてびっくりした。「子どもから離れたい」という個人的な感情だけで託児付き講座を受けたのに、心のイライラが少し取り除けた。落ち着いて考えることができるようになって、周りを見る心のゆとりが出てきたら、周りにお世話になっていたことに気づいて、私も提供会員やってみようかな、と考えるようになった。提供会員をしてみたら、利用者側のわがままも見えてきて、自分の態度をすごく考えなおした。【2006.8.30 筆者のインタビュー】

この点については、抽象的・量的データからは見えてこない方法論の限界であり、データと合わせて、本事例のような摩擦の経験をいかに発達に結びつけるのかについて、実践を構造的に捉えていくことが本研究の今後の課題であるといえる。

### 3-4.「支えられた経験から恩返しをしたい」という意識

自由記述をみると、961サンプル中、586件の回答があり、回答率61.0%であった。

そのうち本事業において支えられた経験があるという主旨の回答が70.82% (415件)、支えられるにはさらなる工夫が必要という回答(要望)が28.67% (168件)、その他0.51% (3件)であった。支えられた経験があるという主旨の回答では、「自分が大変なときに助けて頂いた。」「誰かに恩返しをしたい」「我が子にいろいろな人が関わって育ててくれていると実感した。」「提供会員から、身内や親戚の様に気にかけてもらった。」「提供会員のおかげで、家族以外の人と関わる機会ができた。」など、支えられた経験から、このつながりを再生産していきたい思いが綴られていた。一方、さらなる工夫が必要については、「費用の問題」、「障がい児に対する支援の問題」、「保育する方との人間関係」などが挙げられた。586件の自由記述を読み込んでいくと、本事業を取り巻く人々の温かい関係性が見えてくる。

## 4. まとめ

本報告では、福祉事業を受ける親、つまり学習しようという自覚があつて事業を利用しているのではない親を、サービスの客体と位置づけるのではなく、成人の学習における主体として捉え、どのような経験によって、どのような変化が見られるのかを明らかにしてきた。特に、Table11-2「親の経験」と「親の発達」の相関によって、その一端が明らかになったといえる。福祉事業の利用しやすさが、子育ての外部委託化、親の育児力の衰退・低下を助長するというよりも、保育する側である地域住民と、親の間で、親にとって有効な学習機会を提供できるのかどうかを要点となると考えられる。その際、今回特に有意差がみられた、<子どもとの関わり方を学ぶ経験>、<家事や育児の方法を学ぶ経験>、<地域とのつながりを学ぶ経験>が、一つの柱になってくるであろう。本事業を有効に提供することによって、地域住民と親との関わりが生まれ、対話の機会となり、親にとっての学習機会が創られている可能性があるといえる。さらにこのことが、共に支えあいながら子育てをするという、地域の子育て文化を再生産するきっかけとなることも考えられるのである。

※本章は、平成21年度日本社会教育学会紀要論文として掲載が決定している。

---

## 文献

- ① 三輪健二「第1章成人学習論の展開—国際的動向として—」日本社会教育学会編『日本社会教育学会・創立50周年創立記念講座・現代社会教育の理論Ⅲ—成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版、2004年、28-43ページ。
- ② 青木一ほか編者「現代教育学辞典」労働旬報社、1988年、64ページ。
- ③ 依田新監修「新・教育心理学辞典(普及版)」金子書房、1983年、77ページ。

- 
- ④森口兼二。「第1部 第5章 社会教育の学習論」日本社会教育学会編『現代社会教育の創造—社会教育研究30年の成果と課題—』東洋館出版、1988年、190ページ。
- ⑤ オールポート（今田恵監訳）「人格心理学」上下巻、誠信書房、1974年参考。
- ⑥ 社会教育基礎理論研究会「叢書生涯学習Ⅶ 成人性の発達」（株）雄松堂出版、1989年、175～176ページ。
- ⑦幸順子「愛知県における子育て家庭支援の研究—ファミリー・サポート・センター事業の検討を通して」名古屋女子大学 編『名古屋女子大学紀要人文・社会編』53巻、2007年、65～78ページ。東内瑠里子「子育て・家庭教育支援における親の学習機会の再考：佐賀市・鳥栖市のファミリー・サポート・センターを事例として」佐賀女子短期大学『研究紀要』41巻 2007年、69-76ページ等。
- ⑧山下亜紀子「育児支援者の動機付けに見る地域型育児支援の展望」国立女性教育会館編『国立女性教育会館研究紀要』8巻、2004年、39-50ページ。
- ⑨財団法人女性労働協会「緊急サポートネットワーク事業との連携をめざして」『平成17年度ファミリー・サポート・センター活動状況調査結果報告書』同協会発行、2006年。
- ⑩岡崎和美「ファミリー・サポート・センターの現状と今後の展望—要支援事例と専門機関との連携課題に着目して」高知女子大学紀要編集委員会編『高知女子大学紀要』57巻 2008年、81～92ページ。
- ⑪ 東内瑠里子「子育て・家庭教育支援における親の学習機会の再考—佐賀市・鳥栖市のファミリー・サポート・センターを事例として—」『佐賀女子短期大学研究紀要』第41集、2007年、69-76ページ。

## V 本事業の保育者側から見える親育ちの実態

### <要旨>

ここでは、本事業の保育者側から見える親育ちの実態について明らかにしてきた。

保育者が、親との関係において配慮している点は、次の3点である。①子どもの様子をできるだけ細かく親に伝えること。②コミュニケーションを大切にすること。③他人に大事な子どもを預けるから、安心できる雰囲気を作ること。一般的に言われる相談や助言については、「相談されれば、助言するが、積極的なアドバイスは控える」という回答が非常に目立った。そして「積極的に苦言を呈す」というような回答は、1%にも満たなかった。前章において、親の育ちが明らかになったが、その要因は、保育者からの指導というよりも、一緒に子育てをする相手との直接的な関係から生み出されていると分析できる。

さらに注目すべきは、保育者が感じる親の変化も、この3つのキーワードと同じであったことである。もちろん、保育者自身の回答だから当たり前かもしれない。しかし、ここから言えることは、実際に親にかかわっている保育者は、親の肯定的変化(=親の育ち)を、親の否定的変化よりも、確実に実感しているという点である。

### 1. 本報告の位置づけと課題

従来型支援の隙間にあるニーズに対応し、さらに親の学習を促す本事業は、どのような保育者が担っているのだろうか。また保育者は、どのようなことに配慮して、親に関わっているのだろうか。このことについて明らかにした研究は、管見の限り見あたらない。よってここでは、本事業における保育者像とその保育者が親の育ちについてどのように実感しているのかについて具体的に明らかにすることを課題とする。本事業の保育者は、有償ボランティアとしての位置づけであり、市町村ごとの役割のルールがあり、事務局が最終的な責任を果たしているものの、日常的には謝礼の受け渡しを個人同士に任せるなど、保育者が直接親に関わることが大半である。その意味で、保育者の実態を明らかにすることは、これまでなされなかったにも関わらず、地域の支援者と親との関係の構図を明らかにする大きな意義があると考えられる。

### 2. 調査の概要

#### 2-1. 調査時期・対象・方法

調査時期は、2008年1月下旬～2月にかけて実施した。調査対象は、厚生労働省雇用均等・児童家庭局「次世代育成対策交付金」(2007年)の交付を受け活動している540箇所の利用者が、母集団である(母集団の数については、詳細なデータがない)。そのうち女性労働協会ホームページ資料によって連絡先が確認できる508ヶ所に対して、調査協力依頼文と質問紙調査を郵送した。依頼に応じて頂いたファミリー・サポート・センターでは、会員名簿から提供会員5名を無作為抽出していただき、調査紙を配布して頂いた。調査依頼に応じて下さったのは(協力できない旨のご連絡をいただかなかった箇所)、508箇所中、490箇所である。つまり、保育者2450人を調査対象とした。有効回収票は、保育者1,142票、回収率46.61%であった。調査票は、政令指定都市とそれ以外の地域で色

分けをし、回収した際、データを区別することができるようにした。(政令指定都市および中核市 255 票、それ以外の地域 887 票)

## 2-2.調査内容

調査内容は、大きく4つに分かれる。「1. 属性」「2. 親、子ども、その他との関わりにおいて気をつけていること。」「3. 保育をすることで、親に変化はあったか。あれば、それは自分がどのような関わりをしたからだと考えるか。」「4. 本事業に対する感想」である。1以外、すべて自由記述である。

## 3. 結果と考察

### 3-1.保育者の属性

保育者の属性については、表1に示している。保育者は、75.5%が「母親」である。保育者の年齢層は、図1の通り、団塊の世代周辺層が最も多く、次いで、預ける側でもある子育て真っ最中の層(預ける側は、30～45歳未満が8割以上)が多い。また居住期間を15年間隔で区切ると、15年未満が、他の層と比べて約2割増しだったが、20年間隔で区切ると、20年以上同じ地域に住んでいる者は、約半数いる。つまり、地域の新住民だけが中心的に取り組んでいる訳ではないようだ。

家族構成、就労の有無、保育者の年齢および利用している親との年齢の差を見てみると、典型的な支援関係のモデルを描くことができる。最も多いモデルが、子育てを一段落した母親世代、そして専業主婦あるいは家事の隙間を縫って仕事をし、自分の子どもと同じ世代、あるいは少し上の世代の女性を支援している姿が考えられる(図2-A)。次に多いモデルは、子育て中の母親が、同世代の地域の母親とともに利用し、保育している、あるいはお互いに預け合っている姿である(図2-B)。

地域項目と有意差(\*\*\*) $P < .001$ があったのは、保育者の経験年数である。図2に表すように、全体として約8割が5年未満の経験者であるが、特に地方において、経験が浅く、都市部においては5年前後を頂点として緩やかな弧を描いている。この制度は、当初人口5万人以上の市町村特別区等で展開されていたためである。しかし、いまは次世代育成特定交付金事業として全国的に展開可能となっている。

フィールド調査の実感として、特に地方では、子育てを終えた世代が本事業で活躍しているイメージがある。しかし、預ける親の数が一桁になる47歳を区切りに、保育者の年齢と地域(都市部と地方)との相関をみたが有意差はなかった。ただ図1に示すとおり、年齢と両方会員(預ける側でもあるか)であるかどうかには当然有意差があり、47歳未満の保育者は、保育するだけでなく、預ける側に立つ方が、47歳以上と比較して非常に多い。

保育の内容(複数回答可)としては、自宅から保育所等への送迎が最も多い。保育事業という名称から、預かるイメージが先行してしまうが、子どもが保育所や学校を終え、習い事やその後の学童保育、夜間保育など受け入れ先に送迎する活動も多いのである。親子の生活に応じて柔軟な支援がなされている。

表1: 自分の家族における役割

選択肢	%
母	75.48
父	1.93
祖母	8.67
祖父	0.35
その他	6.74
無回答	6.83
合計	100

※無回答には「未婚」等がある。

表2: 就業の有無

選択肢	%
有職	38.2
無職	54.2
無回答	7.6
合計	100.0

表3 有職者の就労形態

選択肢	%
正社員	6.0
契約・臨時職員	16.8
パート・アルバイト	55.9
自営業	11.7
在宅ワーク	4.2
その他	5.5
合計	100.0

表4 同地域での居住期間

期間	%
0年～15年未満	41.6%
15年～30年未満	24.3%
30年～50年未満	23.7%
50年以上	10.6%

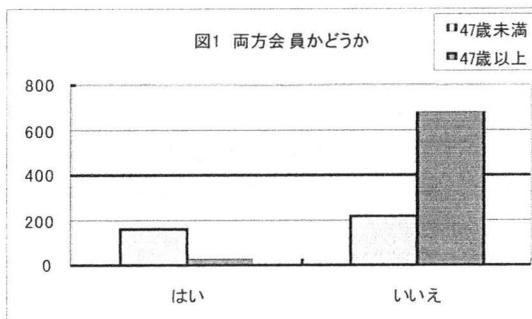
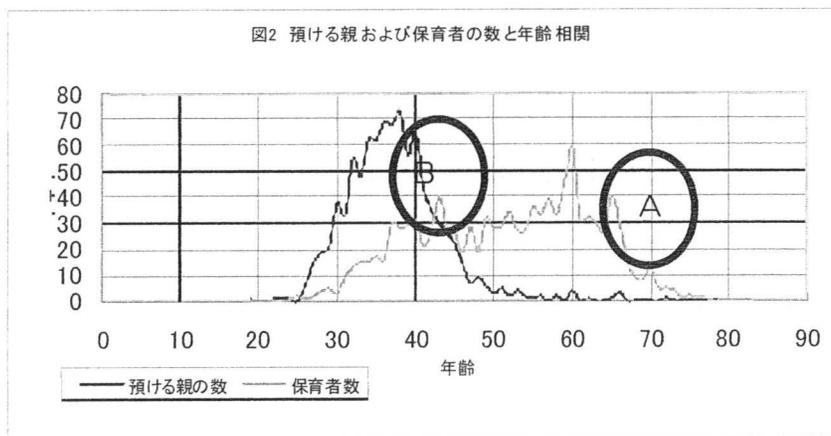


図2 預ける親および保育者の数と年齢相関



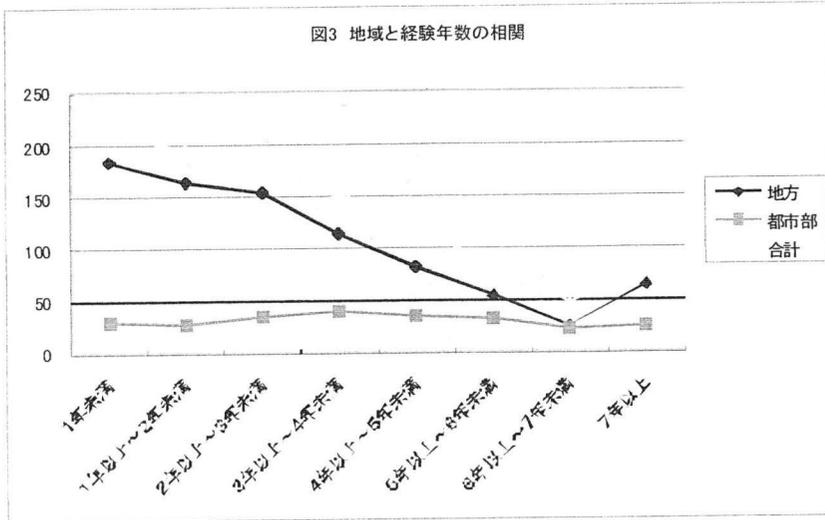


表5 保育の内容（複数回答）

①	自宅から保育所等への送迎。	50.8%
②	保育所・幼稚園の開始前や終了後子どもを預かる。	43.8%
③	学校の放課後や学童保育終了後子どもを預かる。	36.3%
④	学校の夏休みなどに子どもを預かる。	15.0%
⑤	保護者等の病気や急用等の場合に子どもを預かる。	46.4%
⑥	冠婚葬祭や他の子どもの学校行事の際、子どもを預かる。	26.0%
⑦	買い物等外出の際、子どもを預かる。	25.9%
⑧	その他	29.0%

### 3-2.保育者が親との関わりで気をつけている要素の抽出

表6は、保育者が、親との関わりで気をつけている要素である。調査票の質問項目は、「提供会員をしていて、親や子どもとの関係等において、気をつけていることをお書き下さい」であり、表6は、「①親との関係」の欄に回答されたものである。

#### 3-2-1 分析方法

この質問項目に対する回答者数 1142 名中、無回答あるいは「なし」は 129 名 (11.30%) である。

つまり無回答あるいは「なし」以外で回答を行っているのは、1013 名 (88.70%) である。この回答を、筆者が解釈し、キーワードを抽出、そのキーワードの出現数を、「SPSS Text Analysis For Survys 3.0 Japanese」にインポートし、カテゴリー化したのが、表7である。

各保育者は、かなり分厚い記述をしており、より確実性を担保するためには、質的調査が必要である。筆者が任意でキーワード化することは、不確実性を伴うが、全国的動向を量的に把握するためにこの手法をとった。

#### 3-2-2) 結果

表7は、キーワードのうち出現数が10以上のものをまとめた表である。もっとも多いのが、「子どもの様子・子ども理解」346回 (18.61%) であり、次に「コミュニケーション」281回 (15.12%)、「安心・信頼・安らぐ雰囲気」277回 (14.90%) である。

相談や助言については、「相談されれば、助言するが、積極的なアドバイスは控える」という回答が非常に目立った。そして「積極的に苦言を呈す」というような回答は、1%にも満たなかった。

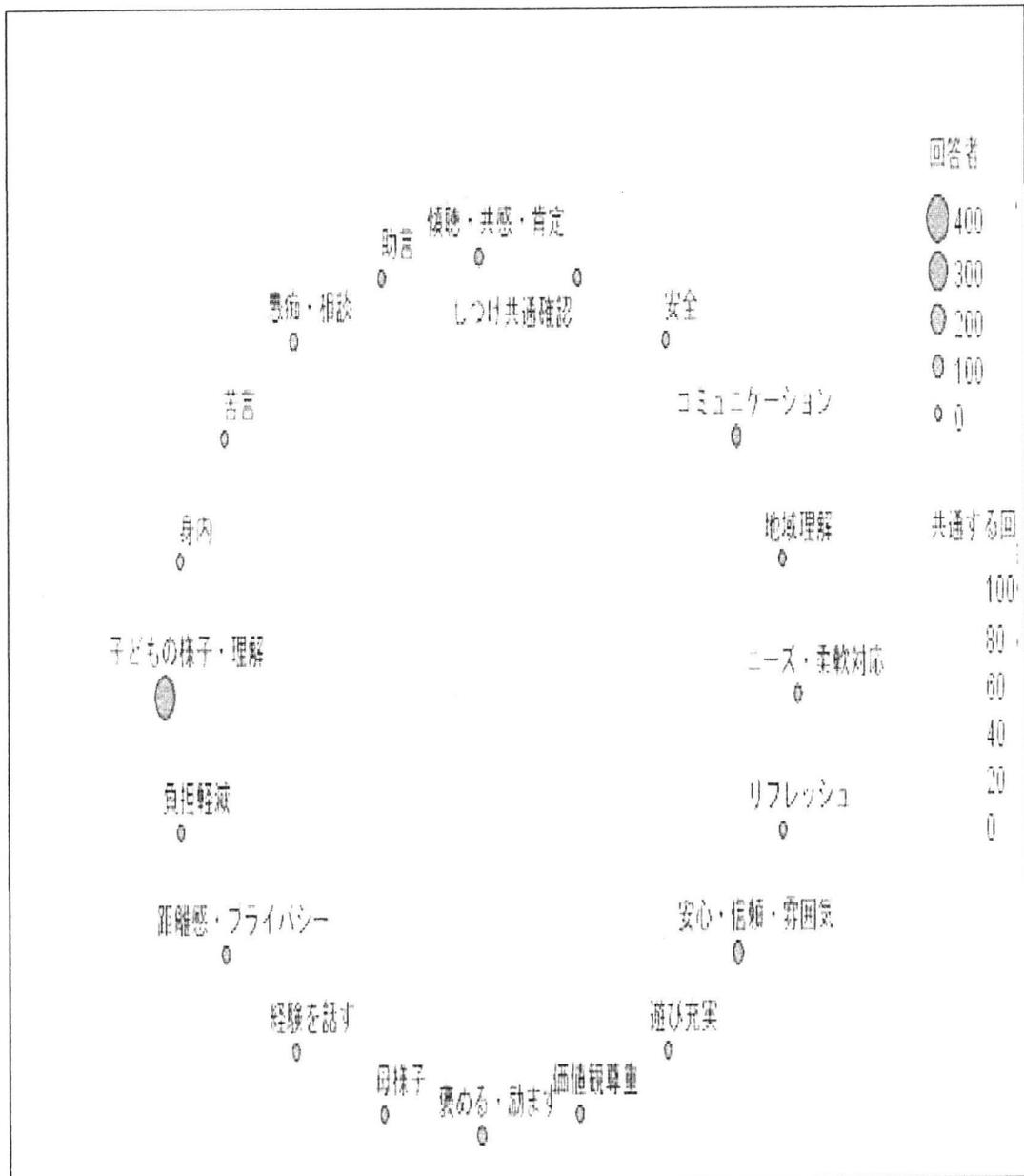
前章において、親の育ちが明らかになったが、その要因は、保育者からの指導というよりも、一緒に子育てをする相手との直接的な関係から生み出されていると分析できる。

さらにキーワード間の関係をわかりやすくするため、図4では、最も多かった「子どもの様子・子ども理解」を中心にサークルレイアウトで表示している。ノード「○」の

表7 キーワード	出現数	%
子どもの様子・子ども理解	346	18.61%
コミュニケーション	281	15.12%
安心・信頼・安らぐ雰囲気	277	14.90%
傾聴・共感・肯定	151	8.12%
愚痴・相談	135	7.26%
距離感・プライバシー	124	6.67%
子育て経験・失敗談を話す	86	4.63%
褒める・励ます	80	4.30%
ニーズ・柔軟対応	67	3.60%
子育て価値観尊重	45	2.42%
育児の負担軽減	42	2.26%
母の様子を気にする	40	2.15%
相談あれば助言	39	2.10%
身内のように接する	36	1.94%
しつけ共通確認	33	1.78%
リフレッシュ	22	1.18%
安全・事故予防	16	0.86%
地域の様子紹介	15	0.81%
遊び充実	12	0.65%
積極的助言、苦言	12	0.65%
合計	1859	100.00%

大きさは、回答者数をあらわしている。線が太いものは、共通する回答を行ったということがわかる。つまり「子どもの様子・子ども理解」と回答した方の多くは、上位のキーワードである「コミュニケーション」「安心・信頼・安らぐ雰囲気」というキーワードも同時に記述している。つまり、回答者の多くが、この3つのキーワードを大切に親と関わっているということがいえる。

図4 キーワード間の関係性(「子どもの様子・子ども理解」を中心にサークルレイアウト)



また、各キーワードの具体的事例は、以下の通りである。

○「子どもの様子・子ども理解」・・・

自分が預けるときに、子供が泣いていないかとか、さびしくないかなど心配だったので、預かるときにも、お子さんが楽しんでいた様子を伝えたり、私もお預かりできてうれしかったことや、家の子も楽しんでいた、ということ伝えるようにしています。

○「コミュニケーション」「価値観尊重」・・・

活動外で顔を合わす時も子どもさんの様子や近況を聞いたりしてコミュニケーションをとっている。見た目はママギャル風だったが、子どもとしっかりかかわり、考え方もきちんとしていて見た目では判断してはいけないと反省した。

○「安心・信頼・安らぐ雰囲気」「傾聴・共感・肯定」・・・

お子さんが〇ヵ月のときからサポートをさせてもらっている様子からなのですが、・・・子育てが大変で大変での思いしかなく「育児ノイローゼ」・・・を思わせるような様子も見られるようになって来てしまったのです。私はその様子を見ているのがつらく、なんとか気持ちを落ち着かせてもらいたく、とにかく母親の今の気持ちをよく聞いてあげること、気持ちも一緒になってあげる事を繰り返し繰り返ししていました。〇月のときが特にひどかったです。そこから少しずつ顔色、顔つきもよくなってきて、親子で外のサークルに参加するようになってきたら、どんどん明るくなってきました。子育てのリズムをつかめるようになってきて、サポートに行くたびに楽しい様子の話を聞けるようになってきました。一年を迎えるようになってサポートの回数も少なくなりよかったです。寂しい気持ちもありますがこれからも応援して行きたいと思います。＜中略あり＞

○「身内のように接する」・・・

転勤者、移住者の方々には、市街を知ってもらうことに役所、病院、市場、食料品の産直店、観光地案内、また食事の話とか、一緒にお料理をつくるとか、遅く帰ってくる夫にも食べさせなさいとか等が生まれることも展望し、楽しめる事柄をもてるように勤める(次第に明るくなり、笑顔が多く出るようになり、涙ぐみながら話だし、夫の帰りが遅く夕方になると不安で仕方なく、そんな時、子供が泣き出すとますますどうして良いのか分からなくなり、家の天井に押しつぶされるような心境になった等) 其後の支援に買い物、子供の通院、観光地等のドライブ等。

○「距離感・プライバシー」・・・

お母さんとは月に何回かあいます。サポートセンターからはその家庭に余りたちいらないようにとの事聞いていますので何か特別な事、又は子供がうれしそうにした事を連絡するようにしています。

#### 4. 保育者側から見える親の変化

ここまで保育者像について明らかにしてきた。

では、このような保育者は、親と関わりながら、親の変化をどのように感じているのだろうか。このことを明らかにするために、調査項目1-2「子どもを預かるようになって、親の変化(①良い面、②悪い面)に気付いたことがありましたか。親の変化について、実際の事例をお書きください。」という質問項目を設定した。

#### 4-1. 親の肯定的変化

##### 4-1-1)分析方法

回答者数は612名(53.59%)、無回答あるいは欠損値は530名(46.40%)である。欠損とは、質問内容が回答者にとってわかりずらかったため、親の変化を、保育者自分自身の親としての変化と捉え、保育者自身の変化を記述している項目のことであり、これは欠損値と判断した。つまり純粹に親の変化を記述した項目のみ採用した。各自由記述を筆者が解釈しキーワードを複数取り出した。各保育者は、かなり分厚い記述をしており、筆者が任意でキーワード化することは、不確実性を伴うが、全国的動向を把握するためにこの手法をとった。筆者が抽出したキーワードを、「SPSS Text Anarysis For Survys 3.0 Japanese」にインポートし、出現数をカウントし、カテゴリー化したのが表8である。

##### 4-1-2)結果

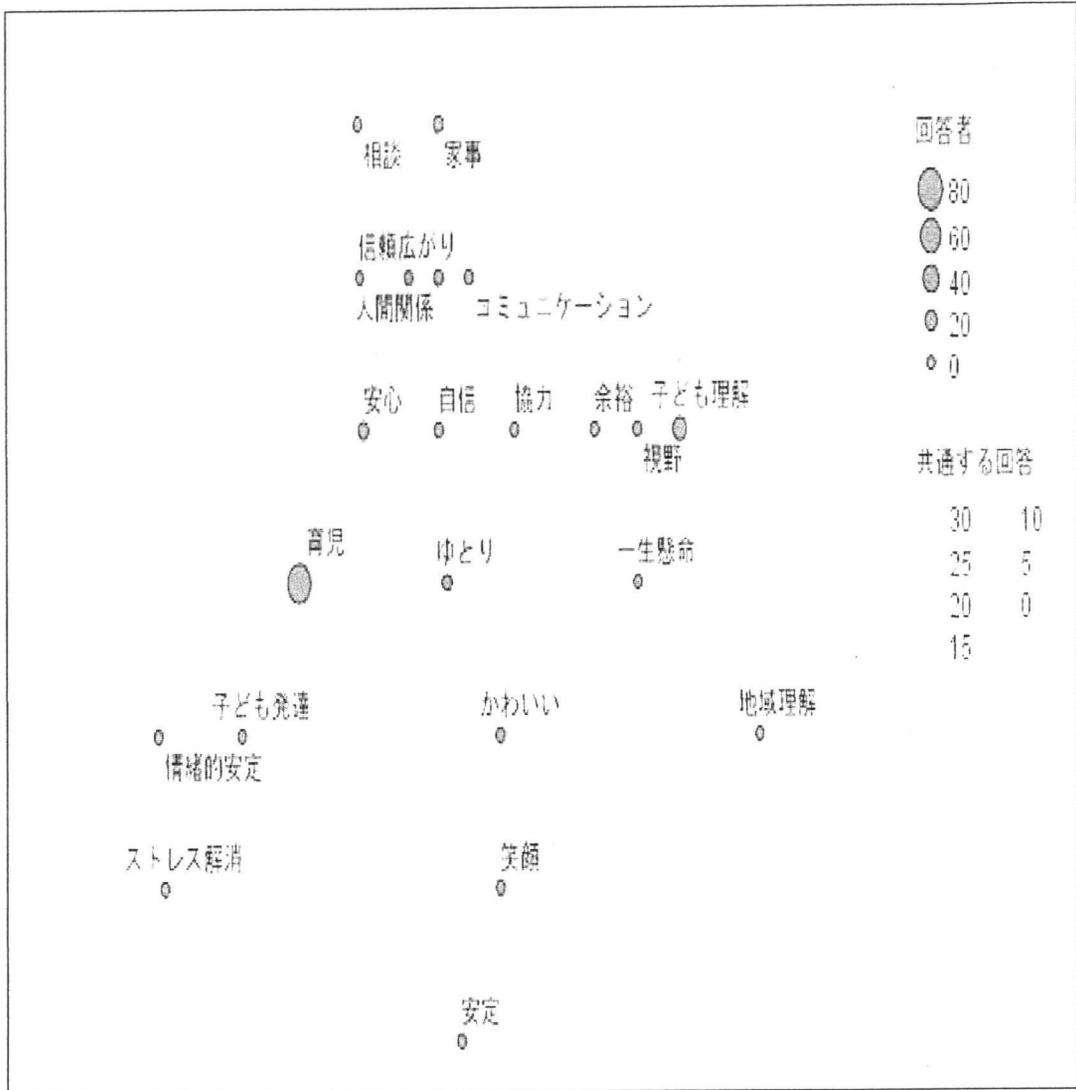
もっとも多いのが、「安心・信頼・情緒的安定」205回(22.85%)であり、次に「コミュニケーション」130回(14.49%)、「子どものことが理解できるようになった」91回(10.14%)、である。

さらにわかりやすいように図5を作成した。これは、「育児が上手になった」(74回)を中心にしたサークルレイアウトである。注目すべきは、「子どものことが理解できるようになった」(91回)との関係である。「子どものことが理解できるようになった」とは、「わが子が、片付けができることを知った」「わが子の性格を受け入れた」「わが子の良さがわかった」という項目をまとめたものである。また「育児が上手になった」は、「子育ての方法を学んだ」等の項目をまとめた。

30 ケース程度ではあるが、子育ての方法を身につける基盤に、「子ども理解」があることがわかる。親は、保育者から単に育児の方法を学んでいるのではなく、保育者という第三者からわが子の様子を教えられること、あるいはわが子を客観的に見ることによって、自分では見えなかったわが子の姿を知り、その子へのかわり方を学ぶことにより、育児の方法を身につけていると考えることができる。

表8 キーワード	出現数	%
安心・信頼・情緒的安定	205	22.85%
コミュニケーション	130	14.49%
子どものことが理解できるようになった	91	10.14%
ストレス解消・リフレッシュ	81	9.03%
笑顔・明るさ	76	8.47%
育児が上手になった	74	8.25%
地域協力・提供会員になった	69	7.69%
相談できるようになった	64	7.13%
感謝するようになった	31	3.46%
こどもがかわいく見えるようになった	23	2.56%
やる気がでた	15	1.67%
視野が広がった	10	1.11%
家事上手になった	9	1.00%
自信がついた	9	1.00%
子どもの発達が促された	9	1.00%
病気がなおった	1	0.11%
合計	897	100.00%

図5 キーワード間の関係性(「育児」を中心にしたサークルレイアウト)



また各キーワードの具体的な事例は次の通りである。

○「安心」・・・預かった内容を伝えると自分が悩んでいる程、人見知りやミルクを飲まない(少食)ではないと安心し、客観的に自分の子どもを見れる様になった。

○「子ども理解」・・・女の子ですが、ある時のお預かりした日、『お母さんがお迎えまでおかたづけするネ!』普通の会話でしょうが、自ら、私に言って、本当にきれいにおかたづけしました。たぶん幼稚園の延長でお友達と一緒にしているものと思います。この事をお母さんに伝えたら、本当に驚いて聞いているので「家では全くしないのよ!」と…。その後、お母さんも、気が付いたのか、我が子が“よくやるよ”と笑っていました。成長でしょうねと。

○「コミュニケーション」・・・自分の子どもの頃の辛い話を語ってくれる様になりました。<中略>

○「育児が上手になった」・・・子供が不安定で親はかわいいらしいが物を与えたりするのみで1年生でも1人で風呂に入れたり、食事も1人、親と一緒にしない。生活を一緒に食事、風呂、

寝る時も一緒にいてあげないと大きくなって大変だと話すと、変化していった。

○「笑顔」・・・子供さんの母親が精神的に疲れ育児放棄寸前で子供さんも笑わなくなったのでサポートさせてもらいお母さんも元気になられ子供さんの笑顔もみられるようになりました。

## 4-2. 親の否定的変化

### 4-2-1) 分析方法

回答者数は247名(21.63%)、無回答あるいは「なし」、欠損値は895名(78.37%)である。欠損とは、質問内容が回答者にとってわかりずらかったため、親の変化を、保育者自分自身の親としての変化と捉え、保育者自身の変化を記述している項目のことであり、これは欠損値と判断した。つまり純粹に親の変化を記述した項目のみを採用した。各自由記述回答を筆者が解釈し、キーワードを複数取り出した。各保育者は、かなり分厚い記述をしており、筆者が任意でキーワード化することは、不確実性を伴うが、全国的動向を把握するためにこの手法をとった。筆者の抽出したキーワードを、「SPSS Text Analysis For Survys 3.0 Japanese」にインポートし、出現数を計算し、カテゴリー化したのが、表9である。

### 4-2-2) 結果

まず、回答者数だけを見ても、肯定的変化と比較して、否定的変化は、非常に少ないことがわかる。もっとも多い出現数は、「サービス・要求・依存」90回(30.00%)であり、次に「時間ルーズ」86名(28.67%)、「自分優先」58名(19.33%)である。またこれらの否定的変化は、事前のマッチングでの相互理解において、あるいは保育者の研修会および双方の交流会において防ぐことが可能なものがあるのではないだろうか。

各キーワードの具体的事例は次の通りである。

○「サービス・要求・依存」・・・お金に不自由なしの家で、けっこう無理なたのみもしたりしてきた。時間外ついでに、クーリーニングお願いとか、ビデオ返してとか、自分でできるものも、してちょうだい！！でもしっかり金額の方は出してくれていました。

○「時間ルーズ」・・・依頼の日程を決めておきながら、後で頼んでいないとうそをつかれた事がありました。これに関しては、自分自身まだ未熟で信用しきっていたものですから口約束はしてはいけないと思いました。

○「自分優先」・・・約束の時間が過ぎてても連絡もなく平気で遅くなってしまふ親(初めはきちんとしていたが慣れてくると・・・)自分磨きに力が入りすぎて毎回毎回自分のためだけに子供を預ける親(預ける回数のおおはばな増加)

○「支払」・・・はじめのうちは同じお金を払っていても感謝の言葉が聞かれたが、回数を重ねるうちだんだん当然といった感じになってきて時には料金が高いと、支払いも拒否されるようになってきた。

表9 キーワード	出現数	%
サービス・要求・依存	90	30.00%
時間ルーズ	86	28.67%
自分優先	58	19.33%
支払滞る	26	8.67%
関わり嫌がる	9	3.00%
子どもとの相性	9	3.00%
礼儀・しつけ	7	2.33%
病児	6	2.00%
保育者のプライバシー	5	1.67%
気遣いなし	4	1.33%
合計	300	100.00%

## 5. 従来型支援を補完する保育者から見える親の変化

ここでは、本事業の保育者側から見える親育ちの実態について明らかにしてきた。

まず、保育者像について明らかになった。家族構成、就労の有無、保育者の年齢および利用している親との年齢の差を見てみると、従来型線を補完している典型的な支援関係のモデルを描くことができる。最も多いモデルが、子育てを一段落した母親世代、そして専業主婦あるいは家事の隙間を縫って仕事をし、自分の子どもと同じ世代、あるいは少し上の世代の女性を支援している姿が考えられる。次に多いモデルは、子育て中の女性が、同世代の地域の女性とともに利用し、保育している、あるいはお互いに預け合っている姿である。

この保育者が、親との関係において配慮している点は、次の3点である。①子どもの様子をできるだけ細かく親に伝えること。②コミュニケーションを大切にすること。③他人に大事な子どもを預けるから、安心できる雰囲気を作ること。一般的に言われる相談や助言については、「相談されれば、助言するが、積極的なアドバイスは控える」という回答が非常に目立った。そして「積極的に苦言を呈す」というような回答は、1%にも満たなかった。前章において、親の育ちが明らかになったが、その要因は、保育者からの指導というよりも、一緒に子育てをする相手との直接的な関係から生み出されていると分析できる。

さらに注目すべきは、保育者が感じる親の変化も、この3つのキーワードと同じであったことである。もちろん、保育者自身の回答だから当たり前かもしれない。しかし、ここから言えることは、実際に親にかかわっている保育者は、親の肯定的変化(=親の育ち)を、親の否定的変化よりも、確実に実感しているという点である。

<要旨>

本研究は、本事業が「親の学習」機能を持っていることを過去2年間の研究で明らかにしてきた。最終年度である平成21年度は、先進地アドバイザーへのヒアリングと全国のアドバイザーへの質問紙調査を実施した。

①これまでの行政の隙間を埋める形でかなり個別・柔軟な活動が展開されているケースがあり、過重労働という課題を抱えながらも地域課題の克服に寄与していることがわかった。

②アドバイザーは、活動の中で、本事業を利用することによる親の変化を感じ取っている。また親と同様、アドバイザーも本事業を利用することによって親が様々な経験をしていることを実感している。さらにアドバイザーは、単に託児を提供しているだけというよりも、ソーシャルワーカーの専門性と同様に、対象者のニーズにそって、人とあらゆる人的社会資源をつなげる役割を担っているといえる。突き詰めて言えば、アドバイザーの専門性は社会関係資本形成に寄与しており、その中で親の学習が促されている可能性があるといえよう。

# 地域の子育て支援におけるコーディネーターの専門性と課題 —ファミリー・サポート・センター事業に着目して—

東 内 瑠里子

The Expertise of Coordinators in Local Community Child-Rearing Support Activities and the Problems They face — Examining the Activities of a family Support Center.

Ruriko TONAI

## 1. 本研究の課題

1994年にファミリー・サポート・センター事業（以下、本事業<sup>①</sup>）が開始され15年が経過した。本事業は、親と同じ市町村に住むボランティアが、子どもを預かる等の活動を通して、親の多様なニーズに応え、安心して地域で子育てできるよう継続的に支援する取組である。現在、全国の市町村のうち約1/3が導入している<sup>②</sup>。本事業は、当初厚生労働省（以下、厚労省）による補助金事業の枠組みがあったため、全国的に運営方法がある程度同じであった。しかし2005年に交付金事業となり、地方自治体の事業となったことで、原型はとどめながらも年々地域の実態、親子の実態に応じたかなり柔軟な対応がなされている。さらに導入する自治体が増加しているため<sup>③</sup>、地域によって多様な展開を見せている<sup>④</sup>。本研究は、過去2年間の研究で、本事業利用によって地域の人々と親が日常的に関わるようになり、そのことが親の学習機会となっている実態の一端を明らかにした。しかし、このような学習を支援するコーディネーターの実態は、これまで明らかにされてこなかった<sup>⑤</sup>。本研究の課題は、本事業の要である、コーディネーターの実態を明らかにすることである。

## 2. 研究の視点

本事業は、専門家による一時的な支援ではなく、専門家ではない市民と親子が日常的に関わる機会を創り出している。後述するが、これまでの子育てサロンやサークルなどに参加しなかった（できなかった）層の親に対しても、支援の手が届くようになった。この成果は、全国の実践者のボランティア精神と努力によるものである。2009年8月厚労省は、本事業に対して、さらに低所得者層の支援（生活保護世帯、市町村民税非課税世帯）やひとり親家庭、病児・病後児の預かりなどの利用支援を交付対象事業として拡大する通知を出した（雇用均等・児童家庭局長通知<sup>⑥</sup>）。これは沖縄県等の団体が、本事業を通して市民が子どもの貧困に向き合った先進的実践を展開し

ている実績から、本事業の可能性を国として期待していることの表れであると考えられる。

しかし、本事業における実践者の活動成果を評価しつつ、政策的に期待されている現状の中で起こっている現場の実態をもっと深く掘り下げて考察する必要がある。

複雑な現代的課題を前に、コーディネーターおよび地域ボランティア(有償)は、実践現場においてどのような専門性を求められ、どのような働き方をしているだろうか。

そこで、本報告では、①コーディネーターの専門性、②コーディネーターの雇用実態、③課題という、3つの視点をもって、コーディネーターの現状と課題を分析したい。

表1. 運営方法

運営方法	市町村数
直営	326
委託	310

### 3. 調査対象・方法・期間

本事業の運営方法は、表1の通りである。市区町村子育て支援課やこども課、福祉課、教育委員会が主体となる自治体が多く、約半数の310団体が委託によって運営している(表2<sup>②</sup>)。

委託先で多いのは、社会福祉協議会とNPO法人である(表3)。各センターの事務局には、アドバイザーがおり、会員の組織や募集、会員間の連絡調整などを行っている。また組織によっては、アドバイザーの下に、サブリーダーを配置し、小学校区で管理しているケースもある。<sup>⑧</sup>

本研究の調査対象は、次の5か所<sup>⑨</sup>のアドバイザーである。

- 1) 本事業のモデルとなった団体(茨城県日立市)
- 2) 全国で最も早く設置した4団体の一つ(山口県山口市)
- 3) 直営によって運営している団体(大阪府貝塚市)
- 4) 委託先として多いNPO法人に設置された団体(福岡県飯塚市)
- 5) 先進的な活動を行っている団体(沖縄県ファミリー・サポート連絡協議会)

これらの団体のアドバイザーにヒアリングし、実態と課題について明らかにする。尚ここでは、各地で名称が若干違うため、次の名称を統一して論じる。各地でアドバイザー、スタッフ、事務

表2. 担当部署課

No.	所属部署課	市町村数
1	子育て支援課・室・グループ等	186
2	こども課・児童課・児童家庭課・児童育成課等	163
3	福祉課・健康課・健康福祉・保健福祉・社会福祉課	131
4	児童福祉課・こども福祉課・保育課・幼児課・こども支援課等	81
5	住民課・町民生活課・町民課	15
6	教育委員会	8
7	商工振興課・観光商工課・工業振興課	8
8	男女共同参画課等	7
9	政策課・計画課	5
10	その他(おもいやり課、市民交流課、子育て計画課等)	45

※女性労働協会資料より筆者が作成